伊丹人

伊丹の歴史
再発見!

Powered by 歴史人

Vol.01
令和3年10月20日発行
発行人／槇野博信
編集人／後藤隆之
発行所／ABCアーク
〒105-0004
東京都港区新橋6-22-6
JOYOビル4階

唯一無二の文化息づく伊丹!

俳諧と酒がつないだ
サロン文化の
歴史を辿る

命を惜しんで逃げたと言われるが…
荒木村重の真の姿とは?

FREE
無料

唯一無二の文化息づく伊丹

清酒発祥の地、伊丹。酒造業は江戸時代に繁栄を極め、財を成した酒造家たちは様々な芸事に励んだ。その中で、自由で大胆な気風の独自の伊丹風俳諧が生まれる。400年の歴史をつむぎ、現在も酒造の町として俳諧・俳句の里として、脈々とその精神は引き継がれている。近年研究が進み評価が変わりつつある戦国武将、荒木村重の有岡城跡などの足跡も残る。そんな唯一無二の伊丹の文化に触れてみませんか。

伊丹市の歴史

兵庫県の南東部に位置する伊丹市。全体に平坦な「伊丹台地」と言われる地形で、東部に猪名川、西部に武庫川という2つの大きな川が流れる。

阪神地域では、猪名川流域を中心に縄文・弥生文化が発展。伊丹市東部の口酒井遺跡のほか、北部・西部・南部の遺跡からも遺構・遺物が多数発見されている。

奈良時代に法隆寺と同じ伽藍配置の「伊丹廃寺」ができる。また、畿内に49院の寺を建立した僧、行基が「昆陽上池」（現・昆陽池）や「昆陽布施屋」（現・昆陽寺）をつくった。

14世紀初頭、伊丹氏を名乗る武士団が現れ、約300年にわたり活動する。南北朝時代に伊丹氏は「伊丹城」をつくり、摂津国の一部を支配していた。天正2年（1574）に荒木村重が伊丹城に入り、「有岡城」と改名する。

近世に入り、酒造業が盛んになり、同時に俳諧文化も発展。俳諧塾の也雲軒が開かれ、俳人の上島鬼貫らを輩出する。

明治22年（1889）、町村制にもとづき伊丹町が誕生する。昭和15年（1940）11月、伊丹市制施行。令和2年（2020）11月に市制施行80周年を迎えた。

目次

4 俳諧と酒がつないだサロン文化
6 現代に留める俳諧と酒の文化
8 敗北後も重用された荒木村重の真の姿
10 伊丹市内・指定文化財一覧／マップ

企画制作／歴史人編集部
協力／伊丹市
編集／金田麦子
イラスト／ササキサキコ
デザイン・DTP ／カチドキ
営業／森 好文　佐藤真一郎　川島早智
校正／東京出版サービスセンター
編集人／後藤隆之
発行人／横野博信
発行所／株式会社ABCアーク

©ABC ARC
本誌掲載記事・写真・イラスト等の無断複写（コピー）・複製・転載を禁じます。

俳諧と酒がつないだサロン文化

江戸時代、清酒を生み出して時代の先頭を走っていた伊丹の酒造業。そこに同じく最先端の文化だった俳諧が出会い、自由な気風の伊丹風俳諧が花開く。伊丹の酒を愛した俳人、池田宗旦が開いた也雲軒には酒造家たちが熱心に通ったという。伊丹の酒と俳諧は切っても切れない関係にあったのだ。

監修・文／本渡 章

©伊丹市立博物館

伊丹の酒造風景

寛政11年(1799)に刊行された「日本山海名産図会」で、伊丹の酒造の各工程が描かれている。写真は「米あらひの図」。

©伊丹市立博物館

江戸時代の銘酒番付

江戸で「丹醸」と呼ばれ、うまい酒の代名詞になっていた伊丹の酒。当時の銘酒番付でも上位を占めていた。

©伊丹市立博物館

伊丹御改所焼印

伊丹の清酒の酒銘を盗用したにせものが度々出回り、伊丹の領主、近衛家から預かった「伊丹御改所」の焼印を押すなどの対策をした。

©伊丹市立博物館

山陰の麒麟児といわれた山中鹿介

戦国時代から安土桃山時代に活躍した武士、山中鹿介の子、山中新六幸元が鴻池(伊丹市)で初めて清酒の醸造に成功したと言われる。

富裕な町人が担い手となった江戸期の軽妙奇抜な伊丹俳諧

伊丹は俳句の街である。日本三大俳諧コレクションの「柿衞文庫」があり、300年前の俳諧塾「也雲軒」の復活、毎月19日「伊丹一句の日」の俳句公募など、さまざまな形で街に俳句が根づいている。はじまりは江戸時代の伊丹俳諧だ。現在の俳句の源流となった俳諧は、座を囲む人々が順に句を詠みつなげて楽しむ文芸で、伊丹では也雲軒と呼ばれた俳諧塾に多くの町人が集った。

也雲軒は、京都を拠点にした雅を愛でる主流派の俳諧とは一線を画した奇抜で軽妙な作風で知られ、伊丹風の俳諧の名を世に広めた。貞門派と呼ばれた京都の俳諧の中心が古典の教養を重んじる知識層だったのに対し、伊丹俳諧の主役は新たな文化の担い手として台頭した富裕な町人たちだった。江戸時代の伊丹は酒造業で繁栄を謳歌していた。酒と俳諧の出会いが伊丹俳諧を生んだのである。

伊丹の酒に惹かれ留まった池田宗旦が俳諧塾を起こす

事の発端は延宝2年（1674）、京都で名をなした俳人の松江維舟（重頼）とその弟子の池田宗旦は、訪れた伊丹で旦那衆にもてなされ、酒の美味に酔いしれた。伊丹は銘醸地として知られる。戦国末期の勇将山中鹿介の子、山中新六幸元が慶長5年（1600）に初めて清酒の醸造に成功し、江戸時代には「伊丹諸白」が諸国に出回った。諸白は双白とも記し、清酒の別称。掛米と麹の双方に精白米を用いて、従来の濁り酒にはない澄明感と美味を生み出した。諸白は上質の酒の代名詞にもなり、江戸では将軍の御膳酒にもなった。

そんな伊丹の酒が池田宗旦の心をとらえた。宗旦は豪放磊落で無類の酒好きだったと伝えられる。宗旦はそのまま伊丹に残って俳諧塾の也雲軒をたちあげ、維舟は京に帰った。師弟の別れが伊丹俳諧のはじまりで、背景に酒をめぐるドラマがあった。宗旦は元禄6年（1693）に亡くなるまで伊丹を離れず、俳諧の指導にあたりつつ、伊丹の酒を楽しんだという。新奇な面白さを競う町人好みの句風を旨とする伊丹俳諧は、こうして生まれた。

伊丹俳諧ゆかりの俳人の句5選（現代語訳付）

踏れけり花ロおしか今一度咲け　池田宗旦

踏まれて無念に思うなら花よ、もう一度咲け(伊丹の酒とかけた洒落)。

にょっぽりと秋の空なる富士の山　上島鬼貫

澄んだ秋空にそびえたつ富士山のなんとにょっぽりとした姿。

牛の角や田螺のからの置所　小西馬桜

くるりと曲がった牛の角はなるほど、田螺の殻置きにぴったりだ。

脈のうつ蛍が尻の光かな　鷺助

蛍の光がはかないなんて嘘。あの脈打つ尻の光の元気なこと。

やあしばらく花に対して鐘つくこと　松江維舟

やあやあ、鐘をつくのはしばらくお待ちを。この花が散りそうだ。

也雲軒ゆかりの俳人・伊丹を訪れた文人

松江維舟（重頼） 貞門派俳諧の重鎮だったが、晩年に伝統的表現に飽き足らない句風を開拓し、伊丹俳諧や大坂の談林派に影響を与えた。

池田宗旦 伊丹に俳諧塾の也雲軒をひらく。町人気質を色濃く反映した伊丹俳諧の中心人物となり、多くの門人を育てた。

上島鬼貫 伊丹の酒造家出身。伊丹風から出発し、貞享2年（1685）に著した俳諧論『独ごと』で境地を高めた。「誠のほかに俳諧なし」の名言で知られる。

小西馬桜 伊丹の俳人。天文19年（1550）創業の老舗で現在も続く小西酒造の4代目当主。小西家は代々の当主に俳諧に熱心な者が多かった。

木村鷺助 伊丹の俳人。享保8年（1723）刊の伊丹俳諧77名の略伝集『在岡逸士伝』（著者は伊丹俳人の百丸）に宗旦、鬼貫、馬桜などとともに名を連ねる。

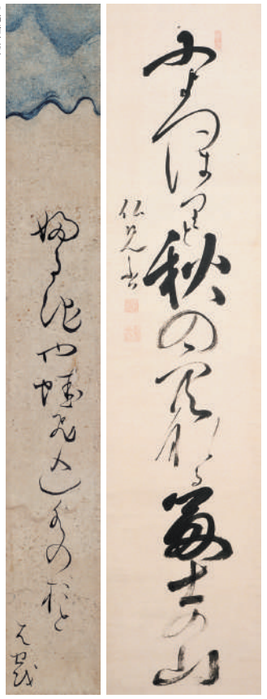
西山宗因 大坂天満宮の連歌所の宗匠で、俳諧では俗語を生かした斬新な句風で談林派をたちあげた。松江維舟と親交があり、也雲軒も訪れた。

井原西鶴 浮世草子作者として人気を博す。一方で西山宗因を師と仰ぎ、談林派を代表する俳諧師としても活躍し、也雲軒を訪れた。

頼山陽 幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた儒学者。文政12年（1829）に篠崎小竹、田能村竹田とともに伊丹を訪れ、酒造家のもてなしに感嘆して詩文を残した。

篠崎小竹 儒学者で詩文、書にも才を発揮。大坂で梅花塾の主となり、多くの門人を育てた。頼山陽と親交があり、伊丹を訪れて詩文を残す。

田能村竹田 幕末文人画壇を代表する画家の一人。画論『山中人饒舌』を著した。頼山陽ら多彩な文人と交わり、伊丹を訪れて画を残す。



©柿衞文庫

芭蕉と鬼貫の真筆

伊丹市の柿衞文庫が所蔵する真筆。左が芭蕉筆「ふる池や蛙飛込水のおと」、右が鬼貫筆「にょっぽりと秋の空なる富士の山」。

©柿衞文庫

蕪村筆「俳仙群会図」鬼貫肖像

伊丹の酒造家の三男として生まれた上島鬼貫は、芭蕉と並び称される俳人だ。俳諧と酒の土地、伊丹を象徴するような人物である。

多くの文人が集った也雲軒は俳人、上島鬼貫らを輩出

也雲軒の名は伊丹風の句とともに広く知られた。伊丹は現在の大阪府から兵庫県にまたがる摂津国の中心に位置し、西国街道と多田道が交わる交通の要所。近隣には西宮戎で賑わう西宮、城下町の尼崎、滝と紅葉で名高い箕面、豊臣秀吉も通った有馬温泉など名所が連なり、遊山がてらに也雲軒を訪ねる文人が多かった。財力のある酒造家がいて、俳諧を通じての交流が盛んだった伊丹は文化サロンが育つ条件が揃っていたのである。

也雲軒ゆかりの俳人に上島鬼貫がいる。松江維舟、池田宗旦に習い、大坂の西山宗因にも学び、20代半ばで著した俳諧論『独ごと』で名声を得た。「東の芭蕉・西の鬼貫」と称されて俳句史に名を残した上島鬼貫の出発点は伊丹俳諧にあった。

伊丹に集った俳人、文人の顔触れも多彩だった。鬼貫が一時期師事した西山宗因は大坂町人の気風を反映した談林派俳諧の創始者で、浮世草子作者の井原西鶴も談林派の俳諧師として活躍。伊丹俳諧とは響きあうものがあり、宗因、西鶴はいずれも也雲軒を訪れている。江戸後期には頼山陽が、儒学者の篠崎小竹、画家の田能村竹田とともに伊丹の酒造家を訪れ、詩文や画を残した。伊丹の酒と俳諧は多くの文人たちの交流を育み、明治以後も途切れることなく、現在の俳句の街・伊丹に受け継がれている。名のある酒造メーカーも健在だ。

現代に留める俳諧と酒の文化

連歌から俳諧、現代俳句までの資料を直筆にこだわって蒐集する柿衛文庫を訪れると、雄大な俳諧の歴史を身近に感じることができる。また、現在も2酒造が変わらず銘酒を造り続け、市内には重要文化財の江戸期の酒蔵や店舗も残る。道を行けば、そこここで酒造の街を体感できるだろう。

取材・文／津曲克彦

伊丹酒蔵通り

JR伊丹駅と阪急伊丹駅を結ぶ一帯は伊丹郷町と呼ばれ、かつて酒造りが盛んだった。現在も当時の酒蔵などが大切に保存されている。

江戸積酒の様子

伊丹酒は海運の発展とともに江戸への大量輸送が可能となった。「伊丹諸白」や「丹醸」と呼ばれ、当地で大ブームに。

©伊丹老松酒造

御免酒

元禄10年（1697）、伊丹の酒屋24軒に帯刀が許され、幕府の官用酒になる銘柄もあった。これを「御免酒」と称した。現在でも「老松」の酒ラベルには、「御免酒」の赤文字が記されている。

柿衛文庫開設の契機となった岡田利兵衛と上島鬼貫の縁

清酒造りで栄えた江戸期の伊丹で花開いた俳諧文化。それを現代に伝えるのが、柿衛文庫だ。収蔵品は松尾芭蕉直筆の句短冊をはじめ軸物や和本など約1万1000点に上り、日本三大俳諧コレクションのひとつに数えられる。

柿衛文庫の創設に大きく貢献したのが、国文学者で伊丹町長・市長を務めた岡田利兵衛だ。利兵衛が俳諧資料の蒐集を始めたのは、昭和12年（1937）のこと。当時町長だった利兵衛のもとをある人物が訪れ、上島鬼貫の短冊を寄贈したことが始まりといわれている。鬼貫は酒造りを営んでいた「油屋」に生まれ、同じく酒造家だった岡田家の先祖、酒人と深い交流があった。鬼貫が酒人に宛てた手紙も残っている。利兵衛は生涯を伊丹で過ごし、没後は伊丹市の名誉市民第一号となった。「そんな伊丹を愛した利兵衛だったからこそ、同郷出身の鬼貫に縁を感じ、俳諧資料の蒐集を始めたのではないか」（柿衛文庫館長の岡田麗氏）。その後、利兵衛は国文学者として芭蕉研究に心血を注ぐ。筆跡を通じて芭蕉の俳風の変化・変容を指摘し、芭蕉研究の新たな可能性を開いた。

俳句の筆跡をたどるには古典独特のくずし字を理解する必要がある。そこで柿衛文庫では、子どもを対象にした「くずし字教室」や「俳句教室」を開催している。また鬼貫にちなんだ「おにつら顕彰俳句」や中高生から20代までを対象とした「鬼貫青春俳句大賞」の開催や、市内各地やウェブを通じて投句ができる「伊丹一句（19）の日」といった企画を行うなど、俳諧・俳句の魅力をより多くの人に親しんでもらおうと積極的に発信している。

当主が俳諧を愛した『白雪』女流作家を虜にした『老松』

江戸時代の酒造家のなかには、自ら俳人として活躍した当主も存在した。『白雪』で知られる小西酒造は代々俳諧に熱心で、4代目当主は「馬桜」を名乗り伊丹俳壇の実力者として活躍した。芭蕉が掲げた俳諧の理念「不易流行」は、同社の経営理念にもなっている。

現当主の十五代・小西新右衛門氏は、「清酒発祥の地」としての伊丹を国内外にPRしている。「伊丹は『空港のまち』というイメージが強いが、清酒発祥の地としての歴史と文化が息づいている。実際に街を回遊しながらそのストーリーを感じてもらえれば、より伊丹の魅力を知ってもらえるのではないか」（小西氏）

また江戸幕府の官用酒「御免酒」のなかで最も格式が高く、将軍の御膳酒にもなった『老松』は、作家・田辺聖子がこよなく愛した酒として知られる。田辺は大阪や神戸に住んだのち、終の住処としてこの伊丹を選んだ。かつて俳諧文化が盛んだった伊丹には、多くの文人墨客が頻繁に往来した。その気風は、時を超えた今でもこの街に根付いている。

長寿蔵

白雪ブルワリービレッジ長寿蔵ミュージアム
兵庫県伊丹市中央3丁目4番15号（レストラン2階）
☎072-773-0524　営業時間／11:30～17:00
休館日／毎月第二火曜日、年末年始
入館料／無料

伊丹の清酒の歴史が学べる参加型ミュージアム

小西酒造の酒造りを五感で体験！

天文19年（1550）に創業した小西酒造。二代目・宗宅が江戸へ酒樽を運ぶ途中、雪をいただいた富士山の気高さに感動し、清酒を『白雪』と名付けた。そんな同社の酒造りの歴史を紹介するのが、19世紀中期に建てられた蔵を改装したミュージアムだ。館内には、昔の酒造りの道具130種200点以上を展示。江戸時代初期の伊丹の酒蔵を再現したジオラマや酒蔵ならではのモチーフを背景に3Dアート写真を撮影できるフォトスポットが揃い、様々な体験を通じて酒造りの歴史を学べる。また館内の醸造施設で醸した『KONISHIビール』や蔵元自慢の日本酒を楽しめるレストランを併設。美酒とともにシェフ自慢の料理を味わいながら、往事の酒造りに思いを馳せたい。

山陽書白雪看板
（原物は小西酒造本社に掲示）

『日本外史』で知られる江戸時代後期の儒学者・頼山陽が、小西家を訪れた際に書いた看板。ミュージアムには複製が展示されている。

柿衛文庫

直筆を通じて知る俳諧の歴史

【柿衛』は、創設者・岡田利兵衛の雅号が由来。連歌から俳諧、俳句へといたる流れを、様々な俳人の直筆を通じて辿ることができる。【2025年3月まで長期休館中】

清酒発祥の地記念碑

酒の歴史に革命を起こした清酒は、現在の伊丹市鴻池で誕生した。平成12年（2000）、鴻池に清酒発祥の地をアピールする記念碑が建てられた。

鴻池稲荷祠碑

中国古代貨幣「布貨」の形をした石碑。山中新六幸元は慶長5年（1600）、この地で「双白澄酒」造りに成功したと書かれている。

有岡城

敗北後も重用された荒木村重の真の姿

妻子や家臣を見捨てた卑怯者と語られることが多かった戦国武将の荒木村重。しかし、卑怯者というイメージは後に付けられたもので、実は名君だったのではないかと、歴史的に見直されつつある。そんな荒木村重にまつわる疑問をQ&A方式で解説し、その真の姿に迫る。

監修・文／小和田泰経

©伊丹市立博物館

荒木村重

難攻不落で知られた有岡城（伊丹市）の城主にして摂津国主。織田信長に重用されるが、1578年に突如反逆する。勝者により悪人のイメージが定着したが、実は人命を尊重し、茶を愛する文化人だったと言われる。

Q 荒木村重は本当に命を惜しんで有岡城から尼崎城へ逃げたのか？

A むしろ戦線を維持し、毛利方と自ら交渉するための行動だった。

尼崎城、花熊城と移り徹底抗戦をした村重

荒木村重は、摂津池田城主池田家の家臣であったが、池田家中の家督争いに乗じて実権を掌握し、畿内を平定した織田信長に服属した。村重の力量を、信長も高く評価していたらしい。伊丹（有岡）城を制した村重に、摂津一国の支配を委ねたのである。こののち、村重は伊丹城を改修して有岡城と改めた。

ところが、天正6年（1578）、村重は信長に「謀反」を疑われてしまう。信長に対して弁解することを命じられた村重は拒絶し、居城の有岡城に籠城した。このため、有岡城は織田信長の軍勢に包囲されることになってしまったのである。

結局、有岡城は1年間に及ぶ籠城戦の末に開城された。このとき、城主の村重が尼崎城に移っていたため、村重の妻子をはじめ500余人が織田信長によって処刑されてしまったのである。こうしたことから、村重は妻子らを見捨てて逃亡したといわれることもある。

ただし、村重は逃れた先の尼崎城で抗戦を続けており、決して逃亡を図ったわけではない。尼崎城には毛利輝元の家臣桂元将が詰めていたから、毛利方と自ら交渉するつもりだったのではなかろうか。

©伊丹市教育委員会

有岡城跡惣構図

伊丹段丘が東に突出した位置に城が築かれ、侍町と町屋地区を含む東西800m、南北1700mを堀と土塁で囲んだ「惣構」の城だった。

尼崎城が危うくなると、村重はさらに花熊城に移って徹底抗戦をしていた。しかし、花熊城が落城する寸前に脱出し、毛利輝元を頼って備後の尾道へと落ちのびたという。

Q 荒木村重は後半生では影響力を失っていた？

A 御伽衆として秀吉の近くに仕え、茶人として「道薫」と名乗った。

「利休七哲」に加えられるほど重要な茶人として活躍した

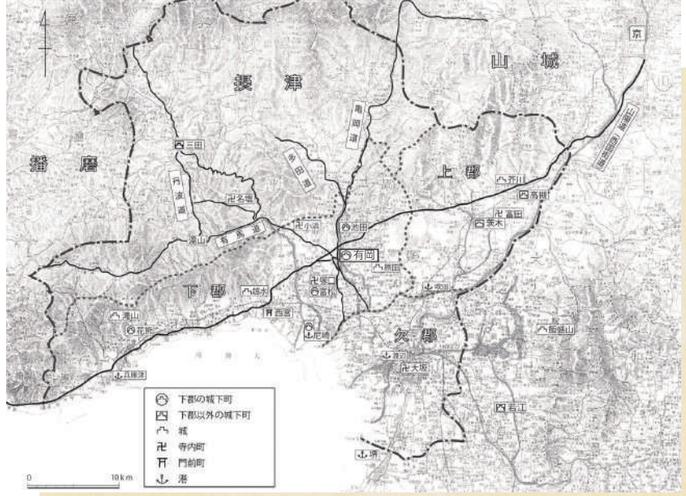
荒木村重は、武名をもって織田信長に高く評価されていたが、粗野な武将だったわけではない。それは、織田信長が上洛し、村重がその麾下に属したころから、堺の豪商が開く茶会に招かれている様子からもうかがい知ることができる。茶の湯に通じた豪商に認められなければ、当然、茶会に招かれることはない。そういうことを考えると、にわかに茶の湯に触れたのではなく、もともと、茶の湯を嗜む文化人だったのであろう。

天正10年（1582）に本能寺の変で織田信長が明智光秀に討たれたあと、翌天正11年に信長の後継者としての地位を固めた豊臣秀吉は、早くも村重を呼び戻している。これは単に、秀吉が村重を高く評価していたことを意味するものではない。村重の「謀反」が事実ではないことを秀吉が信じていたということでもある。

こうして村重は、御伽衆として秀吉の側近くに仕えることになった。大名としての復帰はかなわなかったが、一族が全滅している村重にとっては、秀吉の話し相手になる御伽衆のほうが落ち着くことができたのかもしれない。

出家して「道薫」と号した村重は、茶人としても活躍しており、「利休七哲」に加えられることもある。「利休七哲」の人選は時代によって異なるが、少なくとも重要な茶人とみなされていたのは疑いない。

「イエズス会日本年報」によると、その後、村重が高山右近を評価する秀吉に異見したことから勘気を被ってしまったという。もしかしたら村重は、「謀反」の遠因が右近にあると考えていたのかもしれない。秀吉から遠ざけられた村重は、天正14年（1586）、その波瀾万丈な生涯に幕を下ろした。



©伊丹市立博物館

荒木村重の勢力圏

下郡の有岡城を本拠とする村重は、織田信長から摂津の支配を認められ、上郡の高槻城主高山右近や茨木城主中川清秀らを従えた。

©伊丹市立博物館

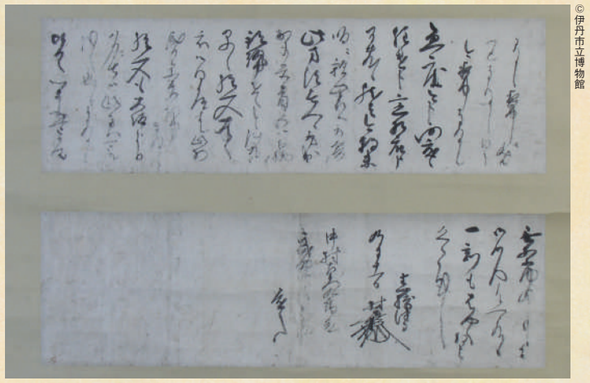
有岡城跡出土の茶釜

千利休の高弟に数えられた村重は、茶の名器を多数所持していたという。写真は有岡城跡（主郭部）の調査で出土した茶釜。

©伊丹市教育委員会

石垣が残る有岡城跡

南北朝時代から戦国時代にかけて築かれた伊丹城に、織田信長の武将・荒木村重が天正2年（1574）入城。有岡城と名を改め大改造した。



©伊丹市立博物館

中村左衛門九郎・武田四郎次郎宛荒木村重書状

天正7年（1579）に村重が尼崎城から雑賀衆に宛てた書状。一刻も早い援軍を求め、戦線を立て直そうとしているのがわかる。

伊丹市内 指定文化財マップ

伊丹市内の指定文化財のうち、
所在地がわかるものを
ピックアップしました（天然記念物を除く）。
本冊子に掲載した施設や
記念碑の場所も示しています。

有岡城跡主郭部石垣

伊丹の観光名所、
名産品、グルメスポットに
ついてはコチラ!

http://itami-kankou.com/

旧岡田家住宅 店舗

掲載施設・記念碑一覧

記号	施設・記念碑名	住所
2	有岡城跡史跡公園	伊丹1・2丁目地内
17	鴻池稲荷祠碑	鴻池6-14
19	柿衛文庫	宮ノ前2-5-20
25	白雪ブルワリービレッジ 長寿蔵ミュージアム	中央3-4-15
26	清酒発祥の地記念碑	鴻池6-8

指定文化財一覧

2021年10月1日現在

	種別		番号	名称	指定年月日	所在地	所有者(管理者)
国指定文化財	史跡		1	伊丹廃寺跡	1966年3月22日	緑ヶ丘 4、5、7丁目地内	伊丹市他
			2 12	有岡城跡	1979年12月28日	宮ノ前3丁目地内他、伊丹1丁目地内他	
	国宝	書		世説新書巻第六残巻 紙背金剛頂蓮花部心念誦儀軌	1952年3月29日		個人
	重要文化財	絵		紙本淡彩山水図 狩野 正信筆	1941年7月3日		
		書		虚堂智愚墨蹟法語絹本 附添状四巻	1957年2月19日		
				滅翁文礼墨蹟偈頌 嘉熙四年正月廿六日			
		文		北畠顕家自筆申状	1960年6月9日		
		彫刻	3	木造釈迦如来坐像	1990年6月29日	鴻池6-19-59	慈眼寺
		建造物	4	旧岡田家住宅（店舗・附棟札1枚 酒蔵・附 釜屋及び洗い場1棟）	1992年1月21日	宮ノ前2-193	伊丹市
国登録文化財	登録有形文化財	建造物	5	旧東洋リノリユーム本館事務所棟（東リ インテリア歴史館）	2020年8月17日	東有岡5-125	東リ
県指定文化財	記念物	史跡	6	御願塚古墳 帆立貝式環濠附主墳	1966年3月22日	御願塚4-325他	須佐男神社
		天然記念物		法巌寺の大クス	1965年3月16日	中央2-6-3	法巌寺
				中野稲荷神社のイヌマキ	2001年3月30日	中野北2-27	伊丹市中野農事実行組合
	有形文化財	彫刻	7	広目天・多聞天立像	1998年4月7日	寺本2-169	昆陽寺
		建造物		昆陽寺山門	1969年3月25日		
				昆陽寺観音堂			
			8	鴻池神社本殿	1975年3月18日	鴻池6-377	鴻池神社
			9	春日神社本殿・附 棟札2枚	1976年3月23日	口酒井1-1-8	春日神社
			10	旧石橋家住宅	2001年3月30日	宮ノ前2-5	伊丹市
			11	桑津神社境内社稲荷社 附 棟札1枚	2015年3月10日	桑津1-2-30	桑津神社
			12	猪名野神社	2020年3月13日	宮ノ前3-6-1	猪名野神社
		考古	13	伊丹廃寺跡出土品	1977年3月29日	千僧1-1-1 伊丹市立博物館内	伊丹市
		有形		酒樽・桶づくり用具一式			
	民俗文化財	無形		摂州兵庫功徳盆踊		南野地域	むぎわら音頭保存会
市指定文化財	史跡		14	辻の碑	1965年10月15日	北伊丹1-89	臂岡天満宮
			15	頼山陽撰並書 大塚鳩斎の墓碑	1966年9月9日	東有岡5-127 杜若寺内	個人
			16	阿部備中守正次の墓	1975年9月1日	口酒井1-6-26	松源寺
			17	鴻池稲荷祠碑	1991年12月26日	鴻池6-14	鴻池合資会社
			18	伝 和泉式部の墓	2000年5月1日	春日丘6-6-66	伊丹市
	天然記念物	植物		浄源寺のイチョウ	1972年2月10日	下河原2-11-63	浄源寺
				猪名野神社のムクロジ	1986年11月28日	宮ノ前3-6-1	猪名野神社
	有形文化財	絵画	19	西鶴自画賛十二ヵ月帖	2006年8月24日	宮ノ前2-5-20	柿衛文庫
				蕪村筆俳仙群会図			
		彫刻	20	阿弥陀如来立像	1965年11月8日	北伊丹3-68	教善寺
			21	十一面観世音菩薩立像		春日丘4-7	発音寺
				大日如来坐像			
			22	石造地蔵菩薩立像	1991年12月26日	東有岡1丁目地内	大手自治会
			21	木造三面大黒天立像	1996年8月22日	春日丘4-7	発音寺
			23	木造十一面観音坐像		荒牧1-17-30	容住寺
		書跡筆跡類	19	芭蕉筆「ふる池や」句短冊	2006年8月24日	宮ノ前2-5-20	柿衛文庫
				鬼貫筆「にょつぽりと」句一行書			
			13	鬼貫筆「秋ハ物の」句一行書		千僧1-1-1 伊丹市立博物館内	伊丹市
		建造物	24	須佐男神社本殿	1972年7月11日	御願塚3-10-5	須佐男神社
		歴史資料	13	鬼貫賛春卜画四季花の画巻	1979年12月4日	千僧1-1-1 伊丹市立博物館内	伊丹市
				文禄年間摂州川辺郡 伊丹郷之図（天保7年写）			
				寛文9年伊丹郷町絵図			
				延宝年間地味委細絵図（写）			
				元禄・宝永年間伊丹郷町絵図			
				文化年間伊丹郷町絵図（天保7年写）			
				文政年間摂州川辺郡伊丹細見図			
				寛文9年銘道標	1988年2月23日		
				近衛家会所関係資料（一括）			
			12	猪名野神社神幸絵巻	1991年12月26日	宮ノ前3-6-1	猪名野神社
	民俗文化財	有形	13	文化5年銘唐箕	1988年2月23日	千僧1-1-1 伊丹市立博物館内	伊丹市
		無形		摂津音頭	1985年4月23日	北部地域	摂津音頭保存会
				伊丹地方石つき唄	1989年4月21日	昆陽地域	伊丹地方石つき唄保存会

KONISHI

詳しい商品情報はこちら

一、八ℓ瓶詰（化粧箱のご用意もございます）

清酒発祥の地 伊丹
ブルワリービレッジ
白雪 長寿蔵

長寿蔵 オンラインショップ
http://choujugura.com/
TEL：072-773-0524
FAX：072-773-1165

◆ 営業時間/10：00 ～ 19：00
◆ 定休日/ 毎月第２火曜日、1 / 1
※都合により、営業日・営業時間は変更となる場合がございます。

小西酒造株式会社

お客様相談室：072-782-5251
（土、日、祝日を除く9時～17時）
創業1550年 小西酒造ホームページ
http://www.konishi.co.jp/

飲酒は20歳になってから。
お酒は、おいしく適量を。飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を与えるおそれがあります。

超特撰 白雪
伊丹諸白
いたみもろはく
本醸造

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「伊丹諸白」と「灘の生一本」
下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷

小西酒造は伊丹・有岡の地で、
四七〇年にわたり
酒造りを続ける蔵元です。

INTERNATIONAL TROPHY Wine WINNER CHALLENGE 2021 HONJOZO TROPHY

インターナショナル・
ワイン・チャレンジ
2021
SAKE 部門
トロフィー
受　賞

七二〇㎖瓶詰

伊丹老松酒造株式会社

伊丹市中央３丁目１番８号 TEL：072-782-2470 http://oimatsu.biz